

刻々と変わりゆく風景の中で振り返る

My landscape experience down under

並河 みき Miki MITSUTA

overlap



あの日、オーストラリア・メルボルンの空港を飛び立った飛行機から見下ろした風景は広大で美しかった。私は14年を過ごした土地を離れ、2017年秋に日本へ戻った。その風景が大きく変わろうとは想像もせずに。

昨年秋から今年初めにかけての森林火災でオーストラリアの186,000km²が焼失した。私が関わったランド・マネージメントプロジェクト、55km²の面積を持つファームNungattaもその広大な敷地が全焼したと当時の上司から聞いた。その後、日本では、梅雨前線の停滞により九州で大災害が発生した。いま、地球温暖化はそのギアをシフトして次の段階に入ったように感じる。そして物理的にも心理的にも、今まで当たり前だった風景が一変し始めている。このような時代にあって、ランドスケープアーキテクトは直接的に自然と関わることのできる職能であり、特に地球温暖化問題に関して、そのスキルを持って対応すべき大きな責任と可能性があると改めて思う。ここでは、私が関わったプロジェクトも交えながら、オーストラリアのランドスケープ業界の特徴や日常業務の中での温暖化への取り組みをご紹介します、この職能の今後を見据えた議論の末端に加えていただけると幸いです。

自然との距離感を縮める

オーストラリアで働き始めて痛感したのは、私は自然を知らないという事実だった。シドニーでの勤務初日は、中心市街地から車で2時間半ほどの海沿いにある現場を視察することだった。その現場は広いブッシュ（オーストラリアでは森や林のことをブッシュと呼ぶ。）で、どこまで行っても草むらや樹木が続いていた。何時間も歩き回って写真を撮り帰って来ると、オーストラリア人の同僚はブッシュの中で樹種の変わり目に気がついたようで、ある一定の地点まではある樹種で、その後は異なる樹種に変わり、森が明るかったと話していた。一方、当時の私にはどこも同じような森に見えていた。その後、シドニーは多くの国立公園に囲まれていることもあり、ブッシュウォーク（日本で言うハイキングや山登り）をする機会が増え、時にはテントを持って2、3日のキャンプをしながらブッシュの中で過ごした。こうした経験を通して、どの樹種がどんな場所に生育し、そのまわりにはどのような植物が生えているかということが見えてきた。自然に触れる機会が多くなると、

その恐ろしさを体感するときもある。クイーンズランド州の無人島で5日間のブッシュウォークをした際に、雨季でもないのに雨が降り続いて川が増水し、危うく孤立しそうになったこともあった。そうした経験を重ねて、徐々に私は自然との距離感を縮めていった。そしてこれはオーストラリアで仕事をするうえで不可欠な経験だった。

温暖化対策に積極的な建築・ランドスケープ業界

さて世界一の石炭輸出国であり、炭素税の導入に何度か失敗しているオーストラリアだが、建築及びランドスケープ業界において、地球温暖化抑制への意識は高い。例えば建築では、Green Building Council Australiaによる「グリーンスター」というサステイナビリティ貢献度を測る制度があり、私たちが建築家と共同でプロジェクトに携わる場合、このグリーンスター取得を目指さないプロジェクトはほとんどない。これは逆に言えば、オフィスに入居する企業や投資家が、グリーンスター評価を取得した物件を望んでいるという証でもある。一方、ランドスケープにおいてそのような評価制度はないものの、公共空間においては、街路樹が健康に育つように道路からの雨水を植栽樹へ誘導したり、踏圧から樹木を保護するため植栽樹を歩道レベルから下げてグレーチングを入れたりという地道な取り組みがなされ、それらをサポートする製品開発が進んでいる。また、多くの街路樹が高齢化し植替えの時期を迎えているメルボルン市では、Urban Forest Strategyという政策のもとに、今まで限られた樹種で街路樹が構成されていたことへの反省も含め、樹種の多様性を推進し、鳥や虫のためのより広範な生態系をつくっていくことを目指している。また、緑陰樹のカバー率も2040年までに現在の22パーセントから40パーセントに引き上げる目標を定めた。

具体的に温暖化の影響が出ている事例として、メルボルンの中心市街地近くの戦争慰霊公園がある。私はこのランドスケープマネジメントプランと新しいコートヤード設計に関わったが、そこでは地球温暖化の影響により枯れてしまう樹木が出てきていた。この公園はランドスケープによる慰霊を表現した空間で、敷地境界に柵がなく、隣接する公園空間とゆるやかにつながるスペースを市民に提供している。中央の小高い丘の上に慰霊の建物がある他は、斜面に多くのメモリアル

ツリーが植えられている。毎年、慰霊が行われるアンザックデイには、それぞれの部隊がそれぞれの樹木エリアにて再会する。

マネジメント計画の中では、歴史的な樹種選定のストーリーに配慮しながら、在来樹種を中心としながらもさらに多様な樹種を含む戦略的な植替え計画や、雨水貯留を促進し、灌水エリアを限定することで自然資源の最適利用などの温暖化対策を盛り込んだ。



図-1 メルボルン戦争慰霊公園 ©Rush Wright Associates

固有の風土や文化を表現する

オーストラリアはかつてイギリスの統治下にあり、イギリス風ランドスケープが主流だった。例えばメルボルン王立植物園は、19世紀のイングリッシュ・ランドスケープ・ペインティングのように、池を手前に対岸の島に育つ植物を眺めたり、美しく整備された芝生を季節の植栽が縁取る構図が演出されている。緩やかに湾曲する歩道は、イギリスの貴婦人たちが、広がったドレスでも歩けるように整備された幅員である。園内に植えられている植物も外来種が多い。しかし、最近はこの国独自の風土や文化をランドスケープで表現することに、皆とても敏感だ。近年、メルボルン郊外に設立された在来種を展示する新しい植物園では、入園すると目の前にセントラル・オーストラリアの赤い大地をイメージしたランドアートのガーデンが広がり、施設全体で多様な在来植物を紹介している。在来種を推奨するのは、オーストラリアらしさという文化的理由からのみでなく、当地の厳しい環境へ最も良く適応する植物種だからでもある。オーストラリアの植物は強い日差しに負けないように、ぶ厚く固い葉を持つ。そして、日中は

葉を太陽に対して垂直に回転し水分の蒸発を防ぐ。こうした在来植物は世界でも珍しい植物固有種が多く、魅力的なランドスケープをかたちづけている。

求められる土木との連携

多発している災害への対応も含め、今後注目されるのはランドスケープと土木との共同作業である。私が土木チームと連携した主なプロジェクトは二つある。一つはメルボルン郊外の貯水池ダムを囲む国立公園のマスタープランで、もう一つはビクトリア州政府の鉄道高架プロジェクトだ。前者のプロジェクトでは、貯水池の底に泥が堆積し貯水量が減少したため、ダムの壁を高くすることになった。その際、嵩上げ後に周囲の国立公園側から貯水池の水面レベルが見えるかという景観上の課題があった。そこで遊歩道をどのレベルまで上げるのか、貯水池の壁断面や斜面形状をどうデザインするかなどを土木と協力して設計することが求められたが、土木側の協力はあまり得られなかった。反対に後者のプロジェクトでは、土木との良い関係が生まれた。プロジェクトは、線路を高架した後の全長12kmの地上部分をサイクリングロードや公園として設計するもので、大雨時の排水計画との関係から求められる公園の高さについて、土木技術者と密に連携しながら調整を繰り返した。結果としてレベルを高くしなければならぬ場所では、その規制を利用してテラス式のスポーツ広場を設計するなど、場の特徴を持たせる工夫ができた。

振り返ればオーストラリアでは、自然と、街なかのランドスケープがつながっていると感じられた。東京で、建物が高くそびえる谷間で、自然の広がりや秩序に思いを馳せることは少し難しいが、今まで以上の想像力で、自然という大きなスケールで起こっているできごとを、街なかにおいて想い描き、理解する必要があるだろう。その想像力に支えられた発想の中に、いま、刻々と変わりゆく風景をつなぎとめるきっかけが見つかるのだと思う。そして、謙虚に日々の取り組みを継続しながら、他のプロフェッショナルと協働し、ランドスケープの波紋をさらに広げていきたい。

(略歴)

ランドスケープアーキテクト (AILA)。宅地建物取引士。現在、東京にて overlap 主宰。東京女子大学卒業。(株) 東急不動産勤務。早稲田大学芸術学校アーバンデザイン科卒業。メルボルン大学デザイン学部ランドスケープ学科にて修士号 (MLA) 取得。2005年より2017年までシドニーとメルボルンで HASSELL, ASPECT Studios ほかにて勤務。2012年ロイヤルメルボルン工科大学 (RMIT) にて設計スタジオを担当。